

そろばんづくり 小野のそろばん

「かず、何やっとなのや！」

お母さんの声がかミナリのようにひびいて、体がビクツとふるえた。同時に、そろばんをひっくり返してテーブルの上でゴロゴロ動かしているぼくの手も、止まった。

「おもちゃの車みたいに転がして。これはすごいそろばんやから、大事に使わなあかんで言うたやろ！」

二発目のカミナリが落ちた。ぼくは負けまいと言い返す。

「でも、みんなこうやって遊んどったけど、こわれへんかったで。」

「なに言うてんの。そろばん玉にきずがつくし、動きが悪なるんや。そろばんはデリケートな道具なんやで。作るのもむずかしいこと、知らんのやろ。」

ずいぶん大げさだなあと、ぼくは思った。

「ほんま？そろばんなんて、かん単に機械で作れそうやんか。」

三発目が来るかなと思ったが、お母さんは「はあ」とため息をついて、それ以上は何も言っていなかった。

次の日、お母さんは学校から帰るぼくを待ちかまえていた。

「ついておいで。」

と言って、ぼくを家の外へ連れ出した。

お母さんの手には、ぼくが昨日おもちゃにしていたそろばんがある。このそろばん、どうするんやろ、どこへ行くんやろと思いつながら、また何か言ったらおこられそうなので、口には出さずについていった。お母さんはぼくの前をだまって歩いていった。ぼくもだまってその後についていった。

「さあ、着いたよ。」

そう言つて、お母さんが立ち止まったのは、ふ通の家の前だった。たしかに「そろばん」と書かれたかん板がある。

「こんなところでそろばんを作っているの。」

ぼくは、少しおどろいた。そろばんは、大きな工場の中で機械で作られているのだとばかり思っていたからだ。

お母さんは、おくにある倉庫のような小さな建物へ向かった。ぼくも、ついていった。

そこは、想ぞうしていたそろばん工場とは全くちがっていた。古い道具がゆかやかべにびっしりならんでいる。だけど、機械らしきものは一つもない。

「トントントン、カンカンカン。」

その音のする方を見ると、おじさんが一人、すわってそろばんのわくを金づちだけで組み立てていた。きびしい顔をしている。部屋の空気がピンとはりつめているようだ。

「かず、こちらは宮本一廣さん。そろばんを組み立てるしよく人中のしよく人やで。」

宮本さんは小野市で作られている播州そろばんの伝とう工芸士で、五十年以上もそろばんを作り続けている人だとお母さんは教えてくれた。

「すごいけど、五十年も同じもんを作ったたらあきそうや。」

思わず言ってしまう、「しまった」と思っていると、宮本さんはにっこり笑って顔を上げた。

「ほんまやな。でもおっちゃんはな、毎日、ちがうそろばんを作つとる気分なんやで。玉とひごの相しようも、一つ一つちがうしな。」

そう言つて、またわくをトントントンと金づちでたたいた。

宮本さんは、機械を使わずにほとんど手でそろばんを組み立てているという。指先の感覚だけで玉とひごの0・1ミリ単位の調整をしているそうだ。ぼくはおどろいて、

「信じられへんわ。」

とつぶやいた。

「気をぬかれへんよ。毎日考えて、工夫して一生けん命努力せなあかん。一人でも多くの人に使いやすいと思ってもらえるように、気持ちをごめて作ってんねんで。」

宮本さんの話をくわしく聞いているうちに、ぼくは昨日の自分を思い出して何とも言えない気持ちになった。

「宮本さん……、すみませんが、このそろばんの玉とひごを調節してやってもらえませんか。」

お母さんは、すまなそうにそろばんを差し出した。ぼくはうつむいたまま、顔を上げられないでいると、

「おっ、まだわしのそろばんを使ってくれてたんや。」

宮本さんのはじけるような明るい声が聞こえた。見ると、宮本さんがうれしそうに笑っている。

「そうですよ！わたしが小学生のときにいただいたあのそろばんですよ。」

そろばん作りにきょう味をもっていたお母さんに、宮本さんは自分が作ったそろばんを特別にあげたのだという。

その後、お母さんは高校生の時、そろばんの全国大会で宮本さんとぐう然にさい会した。

「あのとき、あなたのお母ちゃんから、『おっちゃん、そろばん使いやすいわ。十年間ずっと使ってる』と言うてもらたんや。ものすごくうれしかったんやで。」

そう言うと、宮本さんの顔は、しわと笑みでくちやくちやになった。

お母さんは一度ぼくの方を見て、そしてしみじみと宮本さんに語りかけた。

「このそろばんには、宮本さんの心がぎっしりつまっているようで……。この子にもずっと使ってほしいですよ。他のそろばんには、かえられないですよ。」

お母さんが宮本さんに話すのを聞きながら、ぼくは、昨日転がしていたそろばんを見つめた。

急に手に取ってみたくなくなった。最初は右手で持ち上げ、すぐに両手で持ち直した。おっちゃんのそろばんが、ずっしりと重く感じた。

「おっちゃんのそろばんはな、玉の動きと止まりが最高にいいんや。」

しゅう理がすんでもどつてきたそろばんを見ながら、お母さんが言った。

ぼくには、その意味がよくわからなかったけれど、そろばんをはじいて、そんなことを感じられるようになりたいなと思った。

玉をゆつくりとはじいてみた。

パチツ、といい音がした。

最高のそろばんを作る宮本のおっちゃんと、それを大事にするお母さんは、二人とも最高にかっこいいなと思った。